

リポート
Report

大磯町郷土資料館だより

20

2001・3・31

21

もくじ

- | | |
|-----------------------------|----|
| ◇宅急便で送られて来た煉瓦 | 2 |
| ◇草と木の調査予備調査「タンポポ調査」から分かったこと | 4 |
| ◇文化財保護・郷土資料館の運営について検討 | 8 |
| ◇資料の受入(1) | 11 |
| ◇資料の受入(2)・行事案内 | 12 |



宅急便で送られて来た煉瓦

平成12年2月2日に、宅急便で荷物が届いた。送り主は東京都板橋区舟渡二丁目遺跡調査会の水澤氏で、中味は耐火煉瓦で全部で12点あった。“耐火煉瓦”は「赤煉瓦」と区別するため、別名「白煉瓦」とも呼ばれ、幕末から製造され、現代に至るまで広く普及しているものである。

ただ、やはり煉瓦という一般的なイメージとしては「赤煉瓦」が想像されるが、特に横浜新港埠頭煉瓦倉は「ハマの赤レンガ」と呼ばれ有名である。

参考までに煉瓦の各部位の名称を掲げておく。さて、問題の耐火煉瓦であるが、表でもわかるとおりすべてが欠損品であり、製造当初の姿を呈しているものは皆無である。しかし、耐火煉瓦にはほとんどと言ってよいほど、刻印（文字やイニシャル）がプレスされている。この刻印から製造会社をある程度割り出すことができ、流通経路を含めた社会情勢を知ることができる場合も少なくない。

1は「SYOWAYOGYO」という刻印がプレスされている。直訳すれば、「昭和窯業」となり、名前から昭和に入ってから会社の製品と考えられる。工場通覧には、福岡県山門郡瀬高町に「昭和窯業合資会社」の名前がみえる。ただし、創業は大正13年となっている点や製造製品が普通煉瓦である点が気にかかる。窯業に関する小中の会社組織は、明治期から倒産や吸収合併を繰り返しているため、名称変更した可能性もある。3や5、6の資料も同様と考えられる。

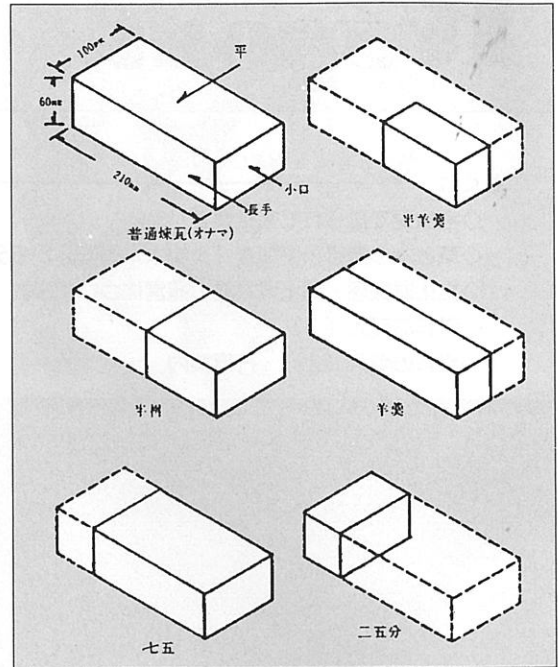
2は「NT NIHONTAIK・・・」という刻印がプレスされている。「NT」のイニシャルから、この製品は茨城県多賀郡松原町(現高萩市)に工場のあった「日本耐火工業株式会社」(創業大正6年)のものと考えられる。

4は「□.T.R」の刻印を有するものである。「TR」は恐らく耐火煉瓦と理解されるが、先頭の文字が不明であるため、製造工場を特定することはできない。

7は3文字の先頭の「C」が読めるだけで、漠然と「中央」とか「中京」と言う言葉が想像されるに過ぎない。工場通覧には、愛知県東春日井郡高蔵寺町(現春日井市)に「中央耐火煉瓦製造所」(創業大正5年)、名古屋市東区千種町(現千種区)に「中京煉瓦工場」(創業大正3年)があったことが知られているが、特定するに至っていない。

8は恐らく3文字と考えられるが、最後尾の「A」しか読み取れない。この「A」が「association」を指しているのかも不明である。

9と10も8と同様で、3文字あり、「T.Y.A」とブ



煉瓦の形状と寸法(日本の赤煉瓦より抜粋)

レスされている。「T」は会社の頭文字が想定され、「Y」は窯業の略と考えられるが、製造会社を特定できていない。

11は「IYK」のイニシャルがプレスされているもので、伊賀窯業(三重県創業大正10年)が想定されるが、特定するに至っていない。伊賀窯業の製品と思われるものは、茅ヶ崎市東海カーボン工場内採集の資料があるが、やはり本例と同様菱形の枠内に「IYK」のイニシャルがプレスされている。

12はやはり3文字と思われるが、先頭の文字が不明である。後の2文字は窯業株式会社の略と考えられるが、先にも述べたとおり先頭の文字が不明のため製造会社を特定することはできない。

以上12点の耐火煉瓦の概要を述べた。

耐火煉瓦は名前のおと、火や熱に関係する部分に使用されるもので、6や10、12の資料にみられるとおり耐火度を示す数値がプレスされている。単品としてではなく、複数が積み重なって一種の構造物を形成するが、半永久的なものではないので、機能に欠陥がみられれば、当然廃棄処分となる。本資料もそうしたものの一部と理解できる。

大正12年(1923)の耐火規格統一調査によれば、並形の寸法は一樣ではなかったことが知られているが、東京型はおよそ227×109×60mmである。一方、大正

14年(1925)告示された日本標準規格(JES)では、並形の寸法は215×115×65mmとなっている。また、昭和17年(1942)には230×114×65mmとなった。

紹介した資料は、改めて言うまでもなくほとんどが欠損品であり、こうした寸法上の数値からおよその時期決定することは極めて困難と言わざるを得ない。

ただ、長さでは1や10が昭和17年の数値に近く、幅では3がJES数値に、厚さではほとんどが東京型に該当する。

一方、プレスされた刻印から確実に製造会社が判明したものは、2の日本耐火工業株式会社だけであり、この会社の創業は大正6年となっている。また、少な

からず想定される製造会社としては、昭和窯業合資会社や伊賀窯業株式会社が挙げられ、いずれも創業は大正期後半であった。

ところが、創業の時期が判明しても製品の製造時期を特定することは容易ではない。

したがって、本資料は現状では大正期から昭和にかけての所産とやや幅をもった想定しかできない。今後資料の増加を待って、改めて検討していきたいと思う。

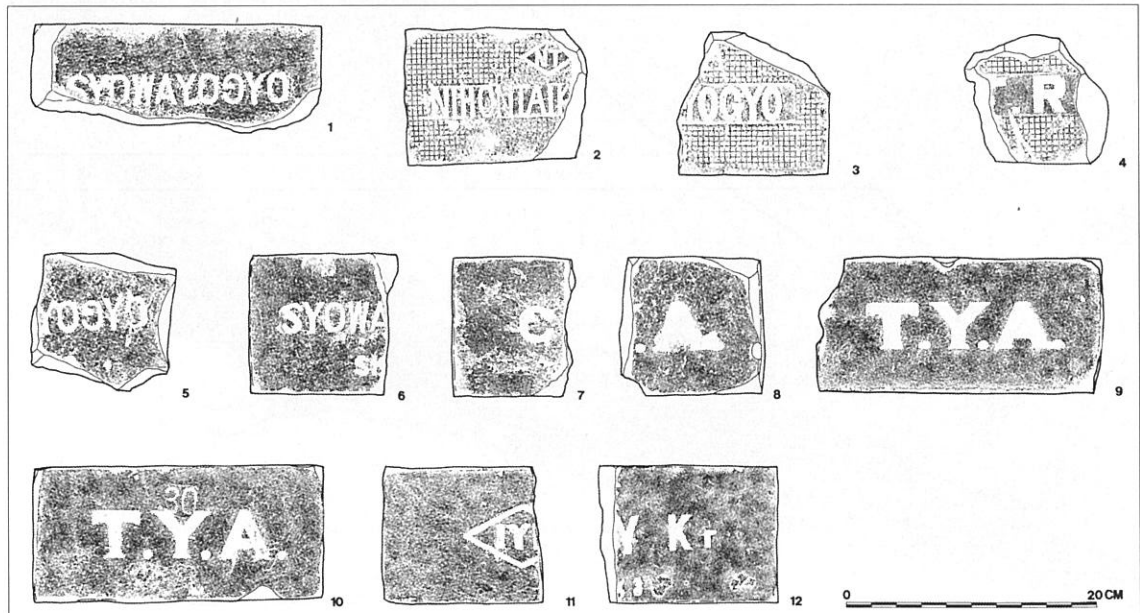
なお、引用参考文献については割愛させていただいた。ご容赦いただきたいと思う。

末尾に、水澤裕子氏の学恩に感謝申し上げたい。

(大磯町教育委員会鈴木一男)

表1-耐火煉瓦一覧表

	長さ	幅	厚さ	遺存状態	刻印	備考
1	230	<82>	60	羊羹状に欠損	SYOWAYOGYO	
2	<142>	<108>	60	1/2欠損	NT NIHONTAIK	平の面は格子目。小口に楕円の刻印。
3	<120>	115	60	1/2欠損	YOGYO	平の面は格子目。
4	<115>	<105>	60	2/3欠損	□.T.R	平の面は格子目。煤付着。
5	<108>	<108>	60	3/5欠損	□□YOGYO	φ1~2mmの長石の混入が目立つ。
6	<110>	110	65	1/2欠損	SYOWA□□	
7	<95>	110	60	2/3欠損	C□□	大粒の物質が混入。
8	<115>	110	60	2/3欠損	□.□.A.	
9	226	104	60	一部欠損	T.Y.A	平の面に一部セメント付着。
10	230	110	<44>	下半1/2欠損	T.Y.A	平の面に一部セメント付着。
11	<123>	107	60	1/2欠損	I YK	セメント付着。熱のためか黒変している。
12	<134>	110	<60>	1/2欠損	□YK	刻印下部に□K3とある。



耐火煉瓦実測図

郷土資料館講座予備調査 「タンポポの分布調査」から分かったこと

1. はじめに

大磯町郷土資料館では、平成11年度から身近な植物を学ぶ場として、郷土資料館講座「草と木の調査」を行っている。1年または一定期間、継続的に町中の自然、特に植物を中心に多角的に調べ、学ぶことが企画の目的であり、今後の資料館の資料として結びつけていければと考えている。初年度の11年度は、秋の植物の分布調査を行った。初秋から晩秋にかけて開花する植物また秋によく見かける実を付ける植物を調査の対象とした。本来であるならば、町内全域を調査する予定としていたが、参加者の人数、日程を考え、旧大磯町地区（昭和29年、大磯町、国府町合併前の旧大磯町域：高麗・東町・大磯・東小磯・西小磯）のみの調査となった。分布を比較するための調査ではあったが、十分な結果が得られず、次年度以降、方法等、再検討が必要であると感じた。したがって、効率的な調査を行うべく予備調査として平成12年、春にタンポポを対象に調査を行った。ここでは、タンポポ調査の概要について紹介する。

タンポポは、環境指標生物としてよく知られている。当館でも1990年身近な生き物調査（タンポポ）とし

て、大磯町広報で呼びかけ、住民参加型の調査を行っている。本調査では、町内でのタンポポの分布状況を知ることが目的としたものではなく、むしろ調査の方法の検討を行うべく進めたものであった。

2. 調査の方法

調査は大磯町全域と対象とした。大磯町は、南側には相模湾が広がり、北側には高麗山、鷹取山などの大磯丘陵が連なる。近隣市町と比較しても自然度の高い町である。調査の実施期間は平成12年5月11日～6月2日までの任意の8日間。対象とした植物はタンポポ属のカントウタンポポ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポ、シロバナタンポポの4種。調査を実施した時期ではシロバナタンポポの開花時期とずれるが、カントウタンポポ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポの総苞片とともに瘦果の同定を重視したことによる。調査者は郷土資料館の職員、臨時職員で構成した。調査に先立ち、2名ないし3名で班を構成し、班ごとに調査を行った。本調査用の調査表に確認した時点で当該地にポイントを落とした。6月2日、6日に調査のまとめを行い、種ごとに1つの地図にまとめた。



調査コース

調査で歩いた道

3. 調査の結果

調査表上の地図また調査の結果をまとめた地図は、大磯町発行の「大磯全図（1万分の1）」を使用した。確認できた場所にポイントを落としたが、場所場所でタンポポの株数を数え、10株未満、10株以上で表記の仕方をかえた。

タンポポ属

多年生の草本であり、春先に開花する。カントウタンポポ、シロバナタンポポは在来種であり、セイヨウタンポポ、アカミタンポポはヨーロッパ原産の外来種である。生殖の形態は、カントウタンポポは、他家受粉により種子形成を行うが、シロバナタンポポ、セイヨウタンポポ、アカミタンポポは単為生殖により個体を増やす。

4種の分布状況

調査によって得られた結果は以下のとおりである。

I) カントウタンポポ

セイヨウタンポポに次ぎ2番目によく確認できた。本調査では、丘陵地で多く確認された。本調査ではJR線の南側では全く確認できなかった。

II) セイヨウタンポポ

町内全域で確認できた。本調査では、一番よく確認できた。

III) アカミタンポポ

市街地を中心に確認された。セイヨウタンポポほど数は多くなかったが、市街地の要所所で確認できた。

IV) シロバナタンポポの分布状況

本調査では、大磯町西小磯の1ヶ所でしか確認することができなかった。3月中旬ごろに高麗山で確認したという情報があり、調査時期を3月または4月上旬にしていたらより多くの株が確認できたと考えられる。



カントウタンポポの分布

●10株以上 ○10株未満



アカミタンポポの分布

● 10株以上

○ 10株未満



セイヨウタンポポの分布

● 10株以上

○ 10株未満



シロバナタンポポの分布

●10株以上 ●10株未満

4. 調査から得られたこと

タンポポは、環境指標生物としてあげられており、種類による分布については、都市化が進んだ地域からアカミタンポポ、セイヨウタンポポ、カントウタンポポが同心円状に分布するといわれている。本調査でも非常に近い結果が得られた。セイヨウタンポポについては、町内全域に広がっている状況がみられた。これは、大磯町域がアカミタンポポとセイヨウタンポポの混合域、セイヨウタンポポとカントウタンポポの混合域と大別される地域であったための結果が得られたのではないかと考えられる。調査範囲を広げた場合は、より明確な形で表れてくると思われる。

本調査の問題点としては、調査時期が遅くシロバナタンポポがほとんど確認できなかった点である。今後調査するうえでの参考としたい。

また、本調査は町内における教育普及活動での活用ということで調査方法の検討を目的に調査を進めたが、植物の開花時の調査を行うにはやはり、月に1回ペースでの調査では、調査時期に無理があり、連続した1週間なり10日間を調査期間にすることが望ましいと感じた。上記で述べたような事柄を今後の教育普及活動に反映させていきたい。

調査者

清水 直子、檜山 裕子、工藤 尚代、杉山 彰子、松本 礼子、落合 祐子、中村 ふぢ、北水 慶一

参考・引用文献

- 神奈川県植物誌調査会(1988)：神奈川県植物誌、神奈川県立博物館
 守矢淳一(1996)：大磯町史9 別編 自然(植物)、大磯町。
 大磯町郷土資料館(1991)：1990年度 大磯町・二宮町の身近な生き物調査 報告書、大磯町郷土資料館。
 北村四郎・村田源・堀勝(1986)：原色日本植物図鑑・草本I、保育社。
 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫(1989)：日本野生植物 草本III 合弁花類、平凡社。
 長田武正(1984)：検索入門 野草図鑑④ たんぽぽの巻、保育社。
 守矢淳一(1989)：ひらつか野の花 上巻(春～初夏)、稲元屋。

(当館 北水 慶一)

表紙写真はセイヨウタンポポ

文化財保護・郷土資料館の運営について検討

平成12年5月より10月まで、大磯町教育委員会では、文化財保護と郷土資料館運営検討チームを設置し、文化財の保護、普及、郷土資料館の展示、資料收藏等の今後のあり方について検討を図りました。この検討チームは大磯町の新しいまちづくりプロジェクトの一つとして位置づけられ、教育・文化の向上を目的として設置されたものです。検討チームの委員は、学識経

験者、町民代表と郷土資料館、町教育委員会生涯学習課職員の合計11名で構成されました。全6回の検討会議でしたが、毎回活発な意見交換が行われました。いただいた意見を参考に今後の郷土資料館運営に反映していきたいと考えております。

以下、検討チームでまとめた報告書を抜粋しました。

検討会議の日程及び会議の内容について

〈第1回検討会議〉(5月18日)

- 議題 (1) 資料館の建設経過と運営課題について
(2) 文化財保護について
(3) スケジュールと検討内容について

〈第2回検討会議〉(6月28日)

- 議題 (1) 常設展示室及び収蔵庫のありかた

〈第3回検討会議〉(7月21日)

- 議題 (1) 町並み博物館構想
(2) 展示替え及び収蔵庫

〈第4回検討会議〉(8月29日)

- 議題 (1) 他館の展示替え等の状況について
(2) 素案検討について

〈第5回検討会議〉(10月4日)

- 議題 (1) 報告書のまとめについて

〈第6回検討会議〉(10月25日)

- 議題 (1) 報告書について

試掘確認調査については町職員が対応し、本調査は調査団方式を採り、日本考古学協会の会員の方に団長を依頼し、町職員を派遣の形をとっている。調査の際、出土した遺物は郷土資料館で收藏しており、年々その数は増加している。今後の出土遺物の收藏に関し、整理作業を兼ね備えたゆとりある保管場所が必要となってきた。

(2) 郷土資料館運営

大磯町郷土資料館は昭和63年10月に開館した。「湘南の丘陵と海」をテーマに考古、民俗、歴史、自然分野の資料の収集、保管、調査、研究、展示を行い、生涯学習の拠点、コミュニケーションの場として地域に根ざした活動を行ってきた。しかしながら、10数年が経過し、常設展示室展示のマンネリ化、郷土資料館の利用者数減などの問題点が出てきた。また、近年は総合学習の観点から学校教育との連携も強く求められてきている。

資料の收藏については、学芸活動の中で収集した資料(博物館資料)、開発を伴う事前発掘調査等で出土した資料(行政的な資料)を併せて、郷土資料館内の第1～3収蔵庫、特別収蔵庫の4箇所また、生涯学習課所有のプレハブ倉庫にも收藏している。年々増える多種の資料のため、収蔵庫を圧迫している。

2. 課題検討

(1) 文化財の保護

1. 文化財業務における体制の整備、強化

地方分権一括法による文化財保護法の一部改正により、国から県へ、県から市町村へと委任される事務、市町村の役割が明確化されたことに伴う事務等、窓口業務をはじめ事務量の増加が予測される。一方で埋蔵文化財の調査・研究、報告書の刊行など専門性の高い作業も比例して多くなるのも事実である。文化財、埋蔵文化財については、保護・保存と同時にいかに活用するかが求められている。そうした、事業の展開から体制および人員の整備が望まれる。

1. 文化財保護及び郷土資料館運営の現状

(1) 文化財業務

従来、文化財保護に関する諸業務は、教育委員会社会教育課で行ってきた。平成11年10月、機構改革があり、社会教育課が生涯学習課へと名称変更となり、係が廃止、班体制へ移行した。郷土資料館については、課の位置づけから生涯学習課内の班として移行し、博物館業務とともに文化財保護の啓発、普及並びに埋蔵文化財に関わる業務を行うこととなった。

平成12年5月現在、大磯町には国指定文化財が4件、県指定文化財が10件、町指定文化財が25件あり、これに県選択文化財が1件加わった合計40件が指定されている。指定されているものには仏教彫刻、社叢林等の天然記念物、横穴群や古墳等の史跡、無形民俗文化財がある。指定されていないものの中にも名所、旧跡といった物件が数多くある。

埋蔵文化財については、現在170箇所及ぶ遺跡が確認されている。立会調査、試掘確認調査は年間5件前後で本調査は2～3件行っている。実際の調査では、

2. 文化財の有効活用

本町には、先にも述べたとおり多くの指定文化財、名所、旧跡、別荘をはじめとする近代化遺産などがある。これらは、個々の特徴をもち、単独でも十分に「大磯」をアピールする力量をもつものさえある。埋蔵文化財についても釜口古墳や楊谷寺谷戸横穴墓群のようにハイキング沿いであって、容易に古代人の息吹を感じることができる遺跡もある。また、本町は海と山に囲まれ、首都圏に近い割には自然が多く残っていることも特性の一つで、町総合計画においても「紺碧の海に緑の映える住みよい大磯」を究極の目標としていることから充分うかがえる。

21世紀に向かい恵まれた環境を十分に活かしながら、文化財の有効的な活用を図り、町全体を活性化させていくことは急務であるが、面積的に狭い本町においては町並み博物館構想（町全体を博物館と考え、保護、保存及び活用を行う；下図参照）が非常に意義あるものと考えられる。郷土資料館をキーステーションとして、文化財・建築物・自然・教育普及の4本の柱の整備・活用を図りながらそれぞれが有機的に連携することで、なお一層の相乗効果を期待するものである。

これを積極的に推進する場合、ハード面においては文化財・埋蔵文化財の整備（修理・修復を含む）や緑地の保存・整備等、ソフト面においては観光とのタイアップや地域住民の協力、ボランティアの活用、学校との協力などが課題としてあげられる。いずれにしても、具体化させていく場合は大きな視点にたって、優先順位を定めるなどして、どこから重点的に取り組んでいくかを明確化する必要がある。

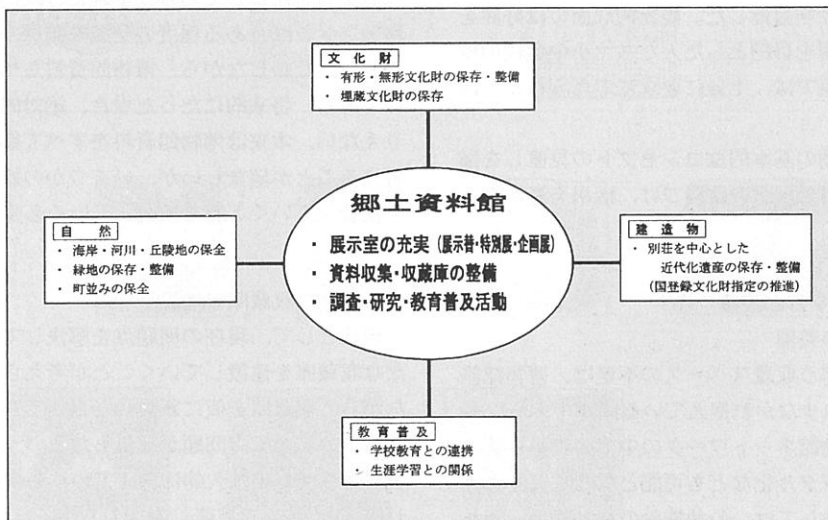
(2) 郷土資料館

1. 運営について

郷土資料館は、地域博物館としてまた生涯学習拠点施設としてまた、一面では観光的施設として昭和63年のオープン以来、十二分に役割を果たしてきたと思われる。しかしながら、10数年の経過から変わり映えない展示、常設展示がマンネリだと聞かれるのは実際のことであり、その声を反映するかのように入館者数は減少してきている。仮に現在の常設展示室の資料を別の資料に置き換えたとしても数年後には同じような状況となり、絶対的な解決にはなりえない。現状の地域博物館であるようなあらゆるものを受け入れ、活動をするのか、テーマを絞り込み活動を進めるのか、館の方針性をまとめることがまず前提となる。館の活動においては、単にモノだけが資料となりうるものではなく、地域の方々の所持されている情報、知識等も資料であり、住民の方々と一緒に活動、運営していくことは、かたや参加者の生涯学習として、かたや資料館における資料作成として結びついていくものである。住民参加の博物館づくりということも今後、望まれる。

2. 展示について

展示のリニューアルについては、即時性、将来の展望を熟慮し、当館における常設展示のあり方、基本的なコンセプトの見直しを図ることが必要である。また、具体論としては地域的にユニークなものをクローズアップし、地域の特徴を活かしながら「大磯とはどんなところか」を表現していくことが求められる。



町並み博物館構想概念図

3. 学校教育との連携

平成14年度より学校週5日制が導入されることから、ますます学校教育と連携を図ることが求められる。学校教育のカリキュラムの一環としての利用、土・日曜日または放課後の利用とでは目的が異なる。博物館としては後者である校外学習を大切し、来館した児童・生徒に興味を導かせ、自主的な学習を助長する場となる必要がある。

4. 収蔵庫について

地域財産を収蔵・保管し、後世につなげていくことは博物館の重要な役割の一つである。社会情勢も変貌を続け、伝統的に「モノ」を作っていた時代から大量生産の時代となった。各時代のありとあらゆるものを受け入れ、収蔵していくことは明らかに不可能な時代となってきている。

5. 保管および資料の活用について

収蔵しているものを展示・教育普及活動で活用するためには十分な準備が必要である。現状では、絶対的に作業スペースが欠けている。よりよい展示、その他の教育活動を進めるには作業スペースの確保は絶対不可欠であり、館全体での整備が求められる。

3. まとめ

(1) 郷土資料館の方向性の見直し

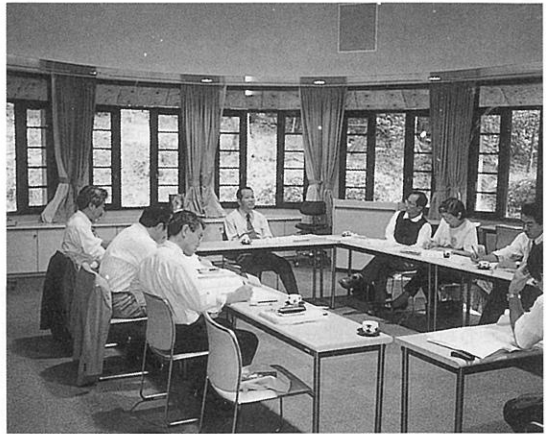
常設展示室は、「湘南の丘陵と海」をテーマに展示が構成され、解説を極力抑えた実物と映像を中心の体感的な空間づくりを目指した。観光的な面では好評を得てきたが、学習を目的とした人たち、小中学校の授業の延長という点では、十分に要求に応えられるとは言いがたい。

郷土資料館活動の基本的なコンセプトの見直しを図り、その中での常設展示の位置づけ、活用を考えることが望ましい。

(2) 収蔵庫のあり方と整備

1. 館内収蔵庫の整備

資料の増加に伴う収蔵スペースの不足は、博物館施設において多かれ少なかれ抱えている問題である。将来的には、博物館ネットワークの中での収集保管の分担、資料のデジタル化なども可能となることを考えられるが、現状としては、公共施設の有効活用、新たな収蔵庫の建設が有効であると思われる。



2. 公共施設の有効活用

第一に幼稚園や小、中学校の「余裕教室」を利用して、学校教育のカリキュラムに合わせた展示を行いながら収蔵することも可能かと思う。資料を収蔵しながら、活用を行うという点では、有効ではあるが、半永久的なスペースの利用が難しい点、自由に資料を出し入れできない点、見せることを重視した場合、実際には収蔵できる数量は限られてくる点など、絶対的な解決に向かうことは難しく、また、資料の保管に伴う人的負担もかかることになり現実的には良策とは言いがたい。

3. 博物館資料と行政的な資料の区分

現在、郷土資料館には博物館資料と行政的な資料が併せて収蔵されている。現状では、行政的な資料が博物館資料を圧迫しており、単純に行政的資料を外部に移動させれば、ある程度の空間を確保することは可能である。しかしながら、博物館資料も年々増加するものであり、将来的にたまった場合、絶対的な解決にはなりえない。本来は博物館資料をすべて郷土資料館で保管することが望ましいが、いくつかの施設に分散させて保管していくことも検討していく必要がある。

4. 新たな収蔵庫の建設

現状として、現在の問題点を解決していくには、新たな収蔵庫を建設していくことが考えられる。しかしながら、収蔵庫を仮に新設したとしても資料の収蔵に関してのすべての問題が解決したというわけではなく資料は今後も半永久的に増えていくものであり、5年、10年のスパンで見直しを図りながら、今後も引き続き検討をしていく必要がある。

【資料の受入 (1)】

ご協力ありがとうございました。

(寄 贈)

高麗 端山 稔氏 飾り紐見本 他
 高麗 藤田 輝子氏 書籍、刺繍の型紙 他
 東町 渡邊 恵子氏 ビール瓶、アイロン 他
 東町 佐藤 久雄氏 羽織、袴 他
 大磯 木村 純子氏 手拭い、蝶標本 他
 大磯 鈴木 茂子氏 オカマサン 他
 大磯 湯口 正毅氏 長持 他
 大磯 山本 武男氏 桶職人道具 他
 大磯 中村 敬氏 机、椅子、草履 他
 大磯 原 恒之氏 記章 他
 大磯 西海 誠氏 古写真、洗濯機 他
 大磯 飯田 善雄氏 衣服、桶 他
 大磯 原 利子氏 羽織、マイワイ 他
 大磯 斎藤安之助氏 アンバリ
 大磯 飯田 福信氏 ポスター
 大磯 福田 良昭氏 漂着物(海産生物)
 大磯 横手 正雄氏 臼、杵
 大磯 船橋 俊通氏 机、膳椀、書籍 他
 大磯 橋本 嘉博氏 モノサシ
 大磯 関野 恭巨氏 雛人形
 大磯 光野 淳子氏 オルガン
 東小磯 新見 紀雄氏 烏帽子
 東小磯 渡邊 圭氏 文化食品保温ケース 他
 西小磯 渡邊 長吉氏 鎌倉囃子道具 他
 西小磯 北谷 澄子氏 帯
 西小磯 川瀬 文子氏 お膳、お櫃 他
 西小磯 土屋 フサ氏 ヒシャク、カメ 他
 西小磯 鈴木 菊之氏 自転車
 国府本郷 近藤 高次氏 写真
 国府本郷 岡田 登氏 蚊帳、火鉢 他
 国府本郷 加藤登思枝氏 書籍、地図、人形 他
 国府本郷 藤田 金蔵氏 ラジオ
 国府本郷 山口 修氏 古地図
 国府本郷 加藤 廣美氏 絵はがき、古写真
 国府本郷 後藤 操氏 赤煉瓦
 国府本郷 吉川 修司氏 鉢、衣服
 国府新宿 蓑島 格造氏 幟
 国府新宿 鈴木 良一氏 棟札
 国府新宿 蓑島平八郎氏 鉄兜、トウミ 他
 月京 今野 実氏 土師器
 生沢 岩崎 侯橋氏 柱時計
 生沢 滝沢すみ子氏 扇風機
 生沢 佐々木佳子氏 着物、帽子 他

虫窪 土方 武治氏 茶筆筒 他
 西久保 小島 弘氏 撮影機、幻灯機 他
 黒岩 守屋 好男氏 醤油樽、杵 他
 二宮町 西山 敏夫氏 天秤棒、ムシロ 他
 二宮町 島山 恵子氏 カメラ、弁当箱 他
 二宮町 五十嵐良子氏 雛人形
 平塚市 今井きみゑ氏 角帯
 平塚市 栗原 治子氏 雛人形
 平塚市 滝山 昭枝氏 雛人形
 秦野市 波多野正夫氏 ケズリカケ
 小田原市 渡辺 勇氏 電気冷蔵庫
 小田原市 長谷川正三郎氏 吸入器、土瓶 他
 小田原市 大石 浩準氏 木箱
 小田原市 内田 勝彦氏 ハチマキ
 茅ヶ崎市 池田 睦子氏 写真
 藤沢市 込山 智子氏 雑誌、灯歌集
 東京都 橋谷田一郎氏 冷蔵庫、洗濯機 他
 東京都 松下 敏昭氏 鉞、鎌 他
 湘南建設(株) ビデオカメラ、徳利 他
 桶文風呂住設 風呂桶
 北浜青年団 着物
 (株)プロバスト 電気釜、魔法瓶

(寄 託)

大磯 宮代 治吉氏 稲荷講資料 一括
 大磯 菊池なつみ氏 菊池重三郎資料 一括
 西小磯 戸塚 浩氏 稲荷講資料 一括
 西小磯 中村 春夫氏 稲荷講資料 一括
 西小磯 高木とみ子氏 掛軸
 国府本郷 添田 光雄氏 加ッカゲ'ン看板
 国府新宿 山川 正氏 書籍
 月京 後藤 勲氏 古文書 一括
 黒岩 守屋 町子氏 古文書 他
 黒岩 坂井 保治氏 高札
 平塚市 加藤 文八氏 古文書
 平塚市 二宮 勝男氏 書幅
 横浜市 田川 順三氏 雛人形 一式
 横浜市 飯島 成三氏 書籍 他
 東京都 近藤敬一郎氏 古文書 一式
 裡道区 獅子頭 一對
 西小磯東区 伊藤博文資料 一括
 西小磯東・西区 古文書 他
 西小磯西子ども会 七夕資料 他
 大磯中学校 吉田茂資料 他

<寄託期間：H12. 4. 1～H14. 3. 31>

【資料の受入 (2)】

(移 管)

大磯中学校
総務課
教育委員会
美化センター

トロフィー
ポスター・弓
報告書
携帯電話機

(購 入)

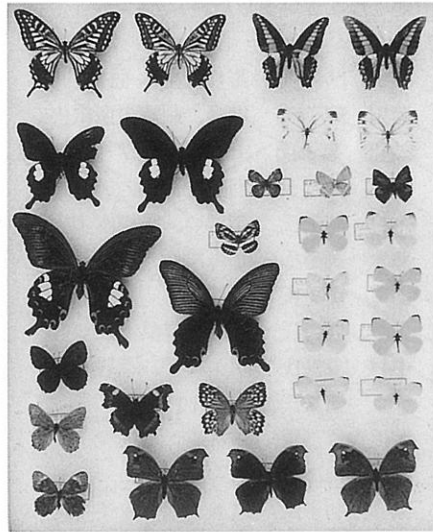
忠敬堂
長谷川正三郎氏
鈴木屋雑貨店

地 図
湯飲み、茶碗 他
上棟セット

(採 集)

町 内
町 内
町 内
町 内

土 器
赤煉瓦
硝子壺
拓本 (寶積院梵鐘)



木村純子氏寄贈 蝶標本

【行事案内】

平成13年9月、東海道宿駅制度の制定から400年になります。制定400年を記念して県内博物館19館で記念の特別展を開催します。全館ともに「近世」、「東海道(または道)」を共通のテーマとし、神奈川県立歴史博物館で総説的な展示を行い、他の18館では、地域性を活かした展示を行います。19館の特別展にあわせてスタンプラリー、クイズラリーも実施します。

<参加博物館>

Antique Museum 江戸民具街道
神奈川県立金沢文庫
馬の博物館
神奈川県立歴史博物館
川崎市市民ミュージアム
横浜市歴史博物館
厚木市郷土資料館
南足柄市郷土資料館
小田原市郷土文化館
箱根町立郷土資料館
三島市郷土資料館
相模原市立博物館
横浜開港資料館
平塚市博物館
大和市つる舞の里歴史資料館
シルク博物館
藤沢市教育委員会生涯学習課博物館準備担当
茅ヶ崎市文化資料館
大磯町郷土資料館

みなさんの参加をお待ちしています。詳しくは町広報をご覧ください。館へ直接お問い合わせください。

▶企画展『新「収集資料展」』

平成12年度に寄贈を受けた資料を中心に紹介します。
5月1日(火)～6月17日(日)

▶企画展『相模湾のウミガメ』

町内海岸に漂着したアカウミガメの記録を中心にウミガメの生態を紹介します。
7月21日(土)～9月2日(日)

▶海の教室「ビーチコーミング」

町内海岸でビーチコーミングをします。
5月13日(日) 午前9時～11時

▶草と木の調査

～城山公園の植物しらべ～
1年を通して県立大磯城山公園の植物を調査します。公園の花ごよみ、植物地図を作成します。
第2、第4土曜日を利用し、年20回。

Report ー大磯町資料館だよりー No.20・21

平成13年3月31日

編集発行 大磯町郷土資料館

〒255-0005

神奈川県中郡大磯町西小磯446-1

TEL 0463(61)4700

FAX 0463(61)4660